

# 「図書館巡礼：図書館が図書館でなくなる日」

坂口 雅樹\*

## はじめに

良い図書館とは何か？明治大学和泉キャンパス新図書館の計画段階から、そして開館後も良い図書館を求めて巡礼をした。最初に結論を言えば、絶対的に良い図書館はこの世にはない。なぜならば良いと感じるのは人それぞれだからであり、「われ思う」からである。それは図書館が進化する有機体であり、ゆっくりだが時には急激に数年単位で変化しているという事情にもよる。

図書館巡礼の旅で強く感じたことは、図書館は資料・情報を受動的に扱うだけではなく、自ら表現者となって社会性をもって活動する機関になっているという現実。紙に記された文字や絵、楽譜、地図などの資料を図書館が表現者となってデジタル、あるいはパフォーマンスという様式で表現して見せる姿。それがいまや図書館の役割になりつつある。図書を収め、情報をナビゲートし、発信するだけの館（やかた）が図書館であるとは言えなくなっている。

肝心な点は図書館員がまずこのことに気づくことである。そして現実から逃げないこと。図書館はもはや司書だけの館ではないのである。図書館という定義の見直しの時代。良い図書館って何ですか？

---

\*さかぐち・まさき／明治大学 調査役

## 共生する図書館

信州伊那谷に世にも稀な図書館が出現した。「伊那谷の、屋根のない博物館の屋根のある広場へ」を合言葉にして生まれた図書館。それが伊那市立図書館である。伊那市立図書館を構成する伊那図書館と高遠町図書館の活動とは、一言でいえば、図書館の存在価値を根源的に問い直し、地域の知と図書館の知を繋ぎ直す活動である。それは平賀研也伊那図書館長の次の言葉が刺激的である。「共に知り、共に創る新しい“知る”プロセスを実現すること」さらに「オープンな知の基盤を構築すること」。これは図書館がまさに図書館から外に出て地域の知を発掘し、「共に知る」を掲げ、「地域を知る」を我らの手にしようとする活動し続けてきたことを意味する。

その活動の代表的なものが「高遠ぶらり」である。これはタブレット端末を活用した地図ナビゲーションのアプリケーションであり、その中身は伊那谷に眠る古地図を図書館がデジタル化して昔と今を繋ぐことにある。つまりそこに住む人々に「昔の今」を感じてもらい、この土地に生きることを強く意識させるツールとなっている。アーカイブ化した地域の情報を手にして知ることが生きがいに繋がり、この地で生きたいと思うことに繋がる。地域全体で知の共有をする活動を図書館が行うことが、図書館総合展「2013 Library of the year」(以下 Loy) の大賞に輝いた要因であった。そして筆者は「そこに」行ってみたいとなったのである。

## 図書館に行ってみたくなる話 (ビブリオテーク・バトル)

2014年3月に明治大学和泉図書館ホールにて「図書館に行ってみたくなる話」というイベントを開催した。誰かが今まで見学した図書館の中から「行ってみたい図書館」について話す。不特定多数の人々に向けて話す。日本を含む世界の図書館について話す。他の図書館を知ってもらうこと。それが図書館全体の底上げに繋がる。そういう思いから立ち上げたイベントである。チャンプ・ライブラリーは会場の参加者による投票(挙手)によって決まる。おそらく本邦初のイベントであろう。

その第4回「東日本の図書館に行ってみたくなる話」(2014年10月開催)

にて伊那市立図書館が都留文科大学附属図書館と同票数で「行ってみたいくなる図書館」のチャンプ・ライブラリーに輝いた。伊那市立図書館のプレゼンターは東京都の行政職員。彼のパワーポイントにはこう書かれていた。

「ぜひ伊那へおいでください。伊那・高遠町図書館を見ても何も目新しいものはないでしょう。しかし私たちは、伊那谷が“知る”を楽しむ場であることは、自信をもってご案内することができます。主役は図書館ではないのです。『館』の中でそこにある資料を提供するだけでなく、地域に立ち、地域の知の営みを探し出し、つなぐ図書館へ。」  
(平賀研也・伊那市立伊那図書館長)

図書館が主役ではなく脇役、単なるツール。そういう捉え方を図書館員はできますか？図書館という箱の枠組みを外したとき、いったいどういうことが起きるのか？図書という財が知のすべてではないということに気が付くはずである。図書という装置だけが知る道具ではない。さらに講演会や音楽、あるいは落語などのイベント開催を行って図書館の枠組みが外れたと満足してはいけない。もっと外に面白い財が図書館の外に連なって存在する。公共図書館ならば市町村の人々の暮らしを知る営み、大学図書館ならばキャンパス内だけではなく地域の人びとの学びを支援する試み。図書館の外で行うこと。伊那谷は図書館の新しい知の営みを提示したと言える。

## 良い図書館を良いという

前出の Loy は 2006 年から「良い図書館を良いという」をキャッチコピーに掲げて、全国の知的情報資源に関わる機関の中から「先進的な活動をしている公共図書館」を顕彰する運動として始まったものである。そして 2013 年の伊那市立図書館に続いて 2014 年には京都府立総合資料館が大賞を受賞した。

このときパシフィコ横浜のプレゼンテーション会場は、大賞が決まった

瞬間「どうして？何故？」という声が囁かれていた。会場の参加者による投票（投票用紙）が島根県隠岐島の海士町中央図書館に集まっていたからである。「ゼロから出発した図書館なのになぜ？離島という地理的ハンディのある過疎の島・過疎の町において移住者を中心に、島民みんなで作った『島まるごと図書館構想』がなぜだめなのか？」というのが大方の気持ちであった。筆者も佐渡島の生まれとして、島の過疎化と人々の暮らしの影を見ているだけに、隠岐の島が大賞を受賞することに期待を寄せていた。しかしノーを突きつけられた。それは選考理由の一つの柱である「先進的な図書館活動を評価する」に該当しないからである。

図書館を作ること、そして人々の知的欲望に応えることはどこでもやっていることであり、先進的でもなんでもないという評価軸。確かに納得の一言に尽きる。前年度の大賞受賞館であり審査委員の平賀伊那図書館長の講評はこうである。

「デジタルな知のコモンズに向けた取組みは、今回の図書館総合展でもいくつものフォーラムが開催されていたことからわかるように、これからの“知る”にとって基本的なテーマだ。そしてまたその意味で、“図書館的”な視点の評価の場において、“博物館的”な事業が評価されたことにも意味がある。」（平賀 Facebook2014/11/8 17:12）

CC(creative commons) BY でオープン GLAM (Gallery Library Archive Museum) 的な取組みを進めようとしている資料館が大賞を受賞したこの意味は計り知れないであろう。大賞受賞候補として前評判の高かった福井県鯖江市図書館でも、NPO 法人情報ステーション「民間図書館」でもない。もう「何とか支援事業」とか「市民が作る、市民とともに」「情報システムの導入」などというのは当たり前で先進的でもなんでもない。いまや地域を超えた空間でツールとして活用できるデジタル情報源の構築・活用が公的機関のメインになる時代になったと言えよう。

なお CC(creative commons) とはアメリカの非営利団体が著作物の適正な再利用を推進する目的で取り組んでいる活動であり、再利用レベルのランク 4 項目の中で BY の表示があれば著作権者が複製等を許可していること

を意味し、もっともオープンな再利用可能データとなる。これは著作権法等が情報共有の障害になることを回避する仕組みであり、したがって図書館なども資料をデジタル化・アーカイブ化した際は CC-BY としてオープンにすることが望ましい。

## 良い図書館を見習う

日本図書館協会建築賞にも Loy にも届かないが、「図書館が閉鎖されたら市民が暴動を起こす」とまで言わしめる公共図書館がある。それは塩尻市立図書館。図書館と市民交流センター（公民館、博物館ほか）、子育て支援センターおよび商工課が一体となって「えんぱーく」という名の総合施設でサービスを展開している。伊那市立図書館が「伊那の谷に打って出る館」としたら、ここ塩尻市立図書館は「市民が駆け込む知のシェルター」、一言でいえば「知の駆け込み寺」と言える。この地に引っ越して来たらまず「えんぱーく」へ、困ったことがあればまず「えんぱーく」へ。市民生活の中心的役割を担う施設の一部として図書館が存在する。

伊東直登・塩尻市立図書館長は、市民が自慢にして誇りとする住民のための施設があれば、これが核となりさらに人が集まると Facebook「館長つれづれ」で発信している。人が集まる必然性は公共施設だけではなく、大学図書館にも通じることである。さらに伊東図書館長の思いは次のように綴られている。

「地域の自慢を伝える番組は数限りなくありますが、図書館がその中で扱われることはめったにありません。数年前、田原市図書館がそんな取り上げられ方をしたときは、本当に感激しました。私たちが目標とする図書館の一つです。そして図々しくも、3年も続けて職員がお邪魔し、学習させていただきました。ありがとうございます。地域を考へ続けている、進化する図書館です。」

(館長つれづれ Facebook2014/11/30 16:51)

良いと思った図書館に職員を何度も派遣して見習う態度。こういう態度

が立派であり、なによりも地域を考え続け、進化する図書館を目指している図書館長こそ素晴らしいと思うのである。

## 図書館には顔がある

武庫川女子大学附属図書館のホームページは人々を魅了する。それは河内鏡太郎図書館長の「愛と勇気の図書館物語」のコラムである。2010年6月の第1話「美女と野獣」でスタートしたコラムは、ほぼ毎月更新され、2014年10月現在で第49話となり、もうすっかり図書館の顔となっている。図書館長室は図書館1階入り口を入れてすぐ右に曲がり真正面奥。常時ドアを開放している。学生にいつも胸襟を開いて話し相手になるのがモットーだと河内図書館長は言う。また2013年11月にリニューアルオープンした2階グローバルスタジオの一角では授業も行っている。仕切りのないオープンエリアで授業を行い、履修していない学生が聞き耳を立てているという。図書館のオープンスペースの使い方が、お互いの存在を認め合っで繋がる。きっちり分けることだけではなく緩やかに繋がるという手法は、共生社会の基盤となる。

Q (質問) 「資格関連の問題集はどこにありますか？」

A (回答) 「5階ライフデザイン・スタジオに本学で取得可能な資格資料や就職活動時に役立つ資料を置いています。種類別にアルファベットで分類して並べていますので、蔵書検索で所在が『5階資格』になっているものは、請求記号のアルファベットを確認して該当の書架に行ってください。」

(武庫川女子大学附属図書館ホームページ Q&A)

これが資格取得のための排架エリアを拡充し、キャリア支援に積極的に取り組む大学図書館の姿勢である。単にテーマ別に書籍をそろえるだけではなく、そこに行きやすいようにガイドすることが必要である。さらに驚くことには、図書館ゲート内にブックカフェを設置して Library Management Group の学生が運営するなど、少なくとも筆者が経験してき

た図書館生活ではありえない図書館運営を行っている。学生が4年間学んだことが社会に通用するために図書館として何ができるかを河内図書館長は常に考え、「すべては学生のため」という言葉を胸に図書館改革を推し進めてきた。当然旧来型の図書館員には居心地がさぞ悪かろうと思う。目の前に佇む学生に、我々図書館員は今まさに心から共鳴しているであろうか？

大学図書館にはもう一つの顔がある。学習・教育支援をする「顔」である。学生が課題解決に図書館を訪れるとき、レファレンスカウンターではなくてもっと奥に行きつくところ、それがライティングサポートや外国語学習支援などの人的支援カウンターである。名古屋大学附属図書館では大学院生を使って情報検索サポート、ITサポート、ライティングサポートなどを行うほか、学生相談総合センター・ピアサポートのコーナーもある。このような多面的サービスは今の大学図書館では当たり前の取り組みと言える。しかし気になるのは図書館員の「顔」である。今、私立大学図書館では専任の図書館員の顔が見えなくなりつつある。対人サービス業務は業務委託者に任せ、インハウス業務は専任の図書館員が担当する。こういう流れが図書館の進化を促すのか、はなはだ疑問とするところである。なぜならば専任の図書館員が学生と直接交わらないで、学生の声を聞かないでどのようなサービスの向上が図れるというのであろうか？

明治大学和泉図書館では、レファレンスサービスからさらに進んで、ライティング支援も大学院生だけではなく専任の図書館員が行うことにした。「大学図書館員向けライティング支援研修」などの外部機関が行うセミナーに多くの図書館員が参加し、知見を得た上でレポートの書き方の支援を行うものである。全学部生が履修可能な「学部間共通総合講座図書館活用法」（半期2単位）において、和泉キャンパスで「レポート・論文の書き方講座」（演習）が開講できるのも、日常的にライティング支援を行っているからできるのであり、これがもう一つの顔としての図書館員の在り方である。

## 動と静の共存が理想の架橋

オープンスペースで集団と個が同居する新潟大学附属図書館中央図書館に行ってみた。増改築部分の外観はまさに「越後のブラックダイヤモンド」

と言える。このブラックダイヤモンドとはデンマークの王立図書館をイメージして筆者が付けた呼び名である。王立図書館は外壁が黒く輝くダイヤモンドのように見えるのでブラックダイヤモンドと呼ばれているが、新潟大学附属図書館の場合は黒ではないがダークグレーのダイヤモンドである。月明かりの夜はさぞかし綺麗だろうなと思わせる緩くカーブを描いた外形。その2階と3階に学習会話可能なエリアがある。2階は外国語の学習教材とアシスタントを配置したFL-SALC(外国語自律学習支援室)と呼ばれるコーナー、さらにプレゼンエリアやワーキングエリアなどの特筆すべきものがある。3階はメディアラボやICT講義室、ワーキングエリアなどを配置している。両階ともいわゆるラーニング・コモンズといわれるエリアである。注目すべきは会話可能なエリアでありながら、窓際を中心に個人で学習できるスペースがあることである。つまり今の学習スタイルは嚴重に音の伝達をコントロールするだけではなく、音を感じても学習できる空間も必要であるということの意味している。多くの大学図書館でも図書館ゲート脇にカフェを設けているのがそのよい例であり、賑わいの中がかえって集中できる場でもある。ラーニング・コモンズと言えばすぐにアクティブラーニングを連想する。

アクティブラーニング(能動的学習)は学習する主体が個人ではなく2人ないしはそれ以上の単位であると普通に言われているが、この学習方法は課題解決型学習方法と言われ義務教育段階から取り入れられており、大学教育でも導入されつつある。大学1年生、2年生を高等学校4年生、5年生と称する教員もいるくらいであるから、大学教育も多様化の時代に入ったと言える。ただし、学習の方法はケースバイケースであり、個人学習を過少評価してはならない。図書館内を歩けば1人空間で学習する方が圧倒的であり、ラーニング・コモンズのエリアでさえも個人学習している人がいるという事実が物語っている。新潟大学附属図書館のラーニング・コモンズについて言えば、「ラーニング・コモンズ=複数人学習=アクティブラーニングエリア」と、単純に考えない方が良い。個人席が窓際にあり、頭脳がまさにアクティブに「活動」しているからである。つまりグループであろうとなかろうと、個人でも十分アクティブな学習ができるというのは少し考えれば十分理解できる。教育学者の中にはそのように言っている人も



いる。アクティブラーニングという用語に違和感を覚えるのは筆者だけであろうか？

ラーニング・コモنزの持つ情報・要素が、生物（学生）に働きかけて行動や感情を誘発するような文脈でアフォーダンス理論が用いられる話を耳にすると、それはラーニング・コモنزという環境に限られたことではなく図書館全体に言えることではなかろうか。明治大学和泉図書館がそのよい例であり、ラーニング・コモنزという室名は使わなくても、コミュニケーションラウンジや情報リテラシー室が十分にその機能を果たしている。またさらに個人で集中して脳を活発にさせるアクティブな「個」のエリアも兼ね備えている。要は行きつくところは個人なのである。

## 協働する図書館

図書館活動を展開するには、いまや学生抜きには考えられない。例えば東京女子大学図書館の学生協働サポート体制やお茶の水女子大学附属図書館のLiSA（図書館学生アシスタント）などのように、図書館活動を通じて学生の成長を促す取り組みを行っている大学が増えている。これらのほとんどは図書館の書架整備や学習支援のサポート、各種イベントの企画・運営に携わる場合が多い。ところが武庫川女子大学附属図書館の場合は、ライブラリー・カフェの運営に学生が関わっている点が特筆すべきことである。カフェでの商品販売・接客、出品するメニューの提案、企画、運営など社会生活をそのまま体験するプログラムとなっている。しかも目を引くのはカフェが入館ゲートの中にあるという大胆なレイアウトである。図書館が図書を貸し出すということは、図書は飲食可能なところで利用されていることを前提にしているはずである。館内だけで飲食をなぜ取り締まるのか？環境の保全、他者への配慮など、納得のいく説明を図書館員はしなければならない。水筒やペットボトル解禁だけでは究極の説明がつかない。図書館はもっと外へ、もっと自由であらねばならない。図書館は秩序を保つが管理する場ではないのである。

学生との協働が図書館活動を活性化させるだけではない。大学内他部署との連携が図書館の可能性を広げている。愛知大学名古屋図書館は学内他

部署と「繋がる図書館」を目指して活動している。企画展示コーナーがその主な舞台であり、教職課程センターと協力して愛知県内の高等学校で使用する教科書および指導要領を網羅的に排架し、学生のニーズを生み出している。この他、キャリア支援課と協力したキャリア支援図書コーナーの設置や英語科教員と協力した英語多読資料コーナーもある。学生との連携では、二胡部や柔道部と、写真部のコラボ展示など、大学の個性を生かした展示を行っている。

注目すべきはこれらを展開する愛知大学名古屋図書館の姿勢である。全国30余りの図書館を館種の違いにこだわらずに「巡礼」した図書館員の存在が大きい。長野県伊那市や塩尻市、愛知県田原市および岡山県瀬戸内市の各図書館長との交流の中で図書館のあるべき姿を模索し、良いと思ったことを実行に移したのである。公共図書館の館長が大学図書館員の考え方に大きなインパクトを与えていることは実に意外である。学内他部署から図書館に配属になった図書館員はこう述べている。「国内の素晴らしい図書館には、優れた図書館長や図書館員がいます。真摯で気持ちがいい人ばかりです。お会いすると嬉しくなります。」図書館巡りをし、優れた図書館長・図書館員に出会う。司書資格がなくても、図書館が好きでたまらないことが大切である。

## 図書館附属大学ができるわけ

図書館は大学の歴史より古く、紀元前より世界の文明史の中で重要な役割を担ってきた。ところがいつのまにか図書館は大学附属図書館となっている。およそこの大学でも教育・研究の中心として図書館の意義を掲げているはずである。しかし実際はどうであろうか？職員組織において、本当に重要な地位を占めているであろうか。40年以上の図書館員生活を送った筆者として懐疑的な思いしか残らない。都内のある大学で講演をしたとき「図書館なんか」という言葉に引っ掛かり、心が折れそうになったのを記憶している。

ところが図書館が教育の中心として存在感を増している大学がある。兵庫県の大手前大学である。図書館はメディアライブラリー (Cell) と呼ばれ、

図書館の周りに Cell と呼ばれる小教室を配して図書館資料を授業中にすぐに使えるように、閲覧エリアと Cell を繋げている。図書館は単なる図書の蓄積と利用エリアではない。少人数教育の場となる小教室、情報発信の拠点となるコンテンツセンターを兼ね備えた、別の言い方をすればさまざまな「知」が交流するフォーラムなど多面的な設備・機能を備えた場所なのである。アフォーダンス理論を持ち出すまでもなく、図書館の環境が放つ香りである。

そこで思い起こすのは明治大学和泉図書館である。2013年5月27日午前11時丁度に、新図書館がオープンしてから11か月で延べ入館者数100万人となったのを記念してあるイベントを行った。利用者が気ままにお祝いメッセージをポストイットに書いてホワイトボードに張り付けるだけのイベントである。その名も「paper twitter」。ここに1枚のメッセージが貼り付けられていた。「もう大学＝図書館で良い。商学部3年生」。この学生にとって大学とは「図書館大学」である。だが一方、図書館が自主的な学びの中心であるという幻想も捨てなければならない。同志社大学良心館のラーニング・コモンズである。

図書館とは全く別組織で運営されるこの日本最大規模のラーニング・コモンズと呼ばれる施設。学生は良心館のラーニング・コモンズを図書館の一部であると認識して「大学＝図書館」とは思わないはずである。むしろ「大学＝ラーニング・コモンズ」であると思うかもしれない。その一方、図書館内にラーニング・コモンズを有して活発に活動している千葉大学附属図書館のアカデミック・リンク・センターがある。これはまさに「大学＝図書館で良い」という思いを誘発させるのではなかろうか？ただし、どちらかの枠組みが良いとは決して言えないのである。

## 打って出る図書館員

図書館に文字通り軸足を置いた図書館長が図書館を変える事例を今まで述べてきた。筆者が出会った記憶に残る3人の図書館長。聞くところによると、活動的な図書館長は他にもいるという。例えば佐賀県伊万里市民図書館長。見学者がふらりと訪れても、すぐに図書館長がお出迎えて、図

書館長室に通してコーヒーを伊万里焼のカップでふるまう、という話が面白い。実はこの図書館の取り組みでユニークなのは「家読（うちどく）」の薦めである。親子の家庭読書を薦めるために「うちどくおすすめの本リスト」を作成するだけでなく、図書館内に家読コーナーを設置している。そして子ども・家庭、図書館、学校、行政・公民館が連携して家読を事業として推進している。また図書館ボランティアが数百人単位でいるのも市民手作りの図書館といえる。お馴染みの武雄市図書館が「テーマパーク型図書館」ならば、伊万里市民図書館は「まちじゅう図書館型図書館」と表現する者もいる。

ところで「なんと言っても館長が一番だ」として、図書館長を改革派の旗手のように表現するだけではない。公共図書館には行動派の図書館員がいる。彼は「何もバックボーンのない人が本当に就職に役立つ資格は何か」という問いを立て、図書館の就労支援コーナーを彩るために、その地域のハローワークの統計データを調べて資料収集に奔走している。大事なのはデータをネットで調べて終わりではなく、市内の就職相談窓口巡りを行い、あるときは外国人労働者、障害者、ひきこもり、介護職・保育士職・看護師職を専門とした就労支援窓口を回り資料を収集してくる。図書館員は座って仕事するだけでなく足で稼ぎなさいという典型的事例である。情報収集するための情報リテラシー教育講座を受講してデータベース検索で実践することも大切ではあるが、これが全てではない。女性再就職サポートセンターや若者サポートセンター、あるいは県の福祉人材センター、外国人労働者相談センターなどを巡り歩く図書館員の存在。それは大学図書館員がキャリア支援室や学生相談室などを巡るのと同じであるが、大学図書館員がはたしてどれだけ行えるのか？図書館内さえほとんど巡回もしない、排架図書にさえ触れない図書館員。まさに塀（事務室）の中の図書館員でよいのか？「なんと言っても館員が一番だ」ではなかろうか？

## 図書館が図書館でなくなる日

「図書館が図書館でなくなる日」とはなにか？それは図書館が変わるのではなく、図書館員が変わる日のことである。司書課程やこの類のコースで

学ぶだけではなく、広く社会のことを知る。そしてなによりも図書館に籠ることなく外に打って出る図書館員が組織の中心を占めた時、それまでの図書館が図書館ではなく新しき知の組織体ができるのである。一方、資料のデジタル化の今を迎え、誰の目にも留まらない資料をデジタル化して公開するだけではなく、利用者あるいは地域の人々の学びのツールとして図書館員が水先案内人になって共に学び、共に楽しむ仕掛けが必要である。図書館ホームページでデジタル資料を公開してこれで終わりでは、図書を棚に並べて何もガイドしないのと同じなのである。

学術情報センター、図書情報館、図書文化館、情報創造館などの、図書館とは呼ばない図書館がいま日本では続々と立ち上がっている。これからも例えば知識創生館あるいはその地域特有の固有名前として「伊那谷学・交流館」などさまざまな名称が生まれるであろう。しかしながら、図書館という名称を今後とも使い続けていく図書館もあることは確かである。図書館が図書館でなくなる日と銘打ったが、実はそれは図書館が真に図書館であるために、さらに進化した日とも読み替えることができる。

最後に紹介するのは、佐賀県武雄市図書館を見学したある図書館員の言葉である。

「よい点から。図書館の敷居の低さ。物販店のように入れます。BGMが流れ、コーヒーの香りが流れ、貸し借りは二の次三の次で、本を眺めたりレンタルCDを眺めたりできます。しゃべり声はあるのが普通。とりあえず入れる気やすさは、従来の中小の公共図書館にはないものです。開館時間が長いのは魅力です。客を指導する雰囲気がない。今の、わがまま化した？市民（利用者）にはうけるとおもいます。デザインのよさ。如何にも公務員といった甘えを感じる雑然さはありません。予算がないから仕方がないと、武雄は言わないのです。iPadのOPACは画像が出て、本選びの参考になります。やはり画像の力は大きく、ほとんどの公共図書館にない強みです。武雄で味わえる代官山。地域差があるはずですが、武雄で代官山の雰囲気を少しでも味わえるのは武雄ではメリットなのだと思います。居住性の良さと、勉強。トータルで居住性が高いので、勉強空間に向いていると思います。勉強がはかどる人が増えるのは、結果として市政にプラスでしょうか。

では次に気になる点を。図書館としての工夫が足りない。ユニバーサルデザインとして、書架間が狭く、車椅子への配慮が足りません。また、児童コーナーなどは、排架サインが足りず、子どもへのわかりやすさが足りないと思います。地域に根ざした図書館と言う点の疑問。地域で注目される題材や、テーマをもっと重視すべきと考えます。排架のわかりにくさ。必ずしもNDCに頼る必要はありませんが、慣れればよいのだろうか？住民が互いに学び合う場所を目指しているか？ツタヤの一方的サービスを越え、図書館に集う方々が互いに結びつき、高め合う場所になればよいと感じました。スタバ以外に食べ物が無い。公共図書館であれば、お弁当持参の方も食事が取れるよう配慮すべきです。」

武雄市図書館の空間のつくりと似た図書館が秋田の国際教養大学図書館である。秋田杉を使った空間の豊かさは人々を魅了する。人里離れて隔絶された大学であるが故の、地の利を生かした24時間眠らない図書館である。我々が学ぶべきものは何であろう。それは武雄市図書館そのものでも国際教養大学そのものでもない。学ぶべきは地域であり、その土地の利点を最大限に活かす図書館の在り方ではなかろうか。大学図書館もしかりである。ニーズを捨てるのではなく、ニーズを生み出すことを考える力を図書館員は養わなければならない。それは資料のもつ魅力を世に伝えるために最新の技術を駆使して表現し、さらに自分の足で外に出て人と交わり人を知ることには尽きる。伊那市立図書館は公共図書館の可能性を遥に凌駕した、我々大学図書館人が見習うべき思想を提示していると言える。

絶対的に良いと言える図書館はない。しかしながら良いと思える図書館はある。繰り返しになるが、それは「われ思う」からである。そして良いと思ったら見習う努力をすることが肝心な点である。

では副題の問いである「図書館が図書館でなくなる日」とは何か。それは「図書館なんか」とか「図書館だから」、あるいは「図書館の人は」とかいう疎外感を生む言い回しがなくなる日である。そして図書館員が知の狩人として生まれ変わる日である。